

園芸のある暮らしと花博の始まり

小 川 明 子

エキシビションとツーリズム研究班 委嘱研究員
名古屋大学 大学院情報学研究科 准教授

本講演では、現代のガーデン・ツーリズムにおいて最も人気の高いチェルシー・フラワー・ショーの誕生に焦点を当てて英国の庭園・園芸史を振り返り、19 世紀の博覧会や消費社会との関わりについて報告した。

はじめに英国の庭園・英国史を概観した。修道院や領主の城郭における中庭など、壁に囲まれた空間として発展した庭は、ルネサンス期には都市文化と視覚芸術の発展により、壁が取り払われ、建築と風景をつなぐ庭園へと変化した。驚きや動きを生み出す噴水、権力を象徴する彫刻の数々、紋章や動物の形に刈り込まれた木々、そして左右対称で規則性を有し、遠くまで見渡せるよう設計された庭園は、当時の貴族の権力を象徴する空間でもあった。英国では 1520 年代にヘンリー 8 世によるハンプトンコートを整備によってこの様式が導入されたと言われる。しかし大邸宅に付属するこうしたヨーロッパ整形庭園にたいし、18 世紀になると、大規模な土地改良を施した、英国式風景庭園が人気を呼ぶ。当時上流階級の子弟はヨーロッパのグランドツアーに出かけ、そこで風景画を買い求めたが、そこにあるような風景を庭園に再現して楽しむことが人気を博した。そこには、政治権力を露骨に誇示したヨーロッパ整形庭園への違和感とともに、その風景画に描かれた風景を作り出して楽しむというピクチュアレスクの要素も含まれていた。

そしてその風景を再現する上で不可欠であったのが、植生が決して豊かではない英国に、ブラントハンターによって世界各地からもたらされたおびただしい数の植物であった。19 世紀中期のヴィクトリア朝時代は、カラフルな熱帯の花などを用いたガーデネスク様式の幾何学花壇が、当時真新しい空間だった公園や駅などに導入され、多くの人の目に触れるようになった一方、都市人口が増え、大気汚染や水質汚染が問題となって新興中流階級が郊外の住宅へと移転した時期でもあった。彼らはヴィラと呼ばれた郊外住宅で、園芸雑誌などを参考に、自ら庭仕事を楽しみ始めたのである。また労働者階級にも、生活改善の運動の一環として園芸が推奨され、窓際で楽しむガラスケース栽培や鉢植えが普及・流行したことで、身近に植物栽培を楽しむ文化があった。つまり、園芸は英国において、上流階級から労働者階級までが共通して楽し

む合理的娯楽として、階層を縦断する趣味となった。

続いて、博覧会と園芸との関わりについて論じた。1851年のロンドン万博、1866年のロンドン国際園芸博など、19世紀半ばからは博覧会が人気となり、園芸もその影響を少なからず受けるようになる。優れた花や果物を展示するだけでなく、博覧会というセティングにおいて、「どのように見せるか」というディスプレイに関心が集まるようになる。1804年に成立した英国王立園芸協会もこうした流れに乗って、多様なフラワーショーやイベントを考案し、徐々にイベントとしてのフラワーショーをどう経済的に成功させるのかに関心を向け、一喜一憂するようになっていく。

一方で、世界から植物がもたらされ、エキゾチック庭園が英国で身近なものになるにつれ、英国の庭とはどうあるべきかが、園芸雑誌や書籍で論じられるようになった。もっとも大きな影響を与えたとされるW.ロビンソンは、英国の気候に合う海外の樹木や宿根草、球根を植栽して、草葉や花の色合いや質感とともに多種を立体的に組み合わせ、自然に見えるように植栽する、手入れの少ない庭を提案した。その後、彼の「野趣」を重視する考え方がG.ジークルらの色彩を重視した庭の実践によって可視化されていき、現代、われわれがイメージするような「イングリッシュ・ガーデン」が考案され定着していくことになる。つまり、急速な工業化や都市化の中での田園回帰や、帝国主義的イデオロギーに対しての英国らしさの追求が、英国の田園風景やコテージ・ガーデンをイメージさせる様式として提起され、新しい中流階級が有する空間を舞台に現出したと言える。

最後に、英国の庭がほぼ完成した20世紀初頭に第一回が始まった（1913）チェルシー・フラワーショーがどのようなものだったかを論じた。結論から言えば現在とほとんど変わらない原型がここで示されている。当時の新聞には、園芸という趣味があらゆる階級にとって共通の話題になっていること、そしてそのアーティスティックなディスプレイへの賞賛が記録されている。マルキーと呼ばれる大規模テントの下に美しくディスプレイされた最高の花々や果物、そしてその外には、1週間に満たない会期が終わると全て壊され、撤去される運命にある見事なロック・ガーデンや日本庭園、ヨーロッパ庭園など、モデルガーデンがかなり本格的に作られた。モデルガーデンで表現されたのは、野趣に富んだアルプス「らしさ」であり、遠い異国の日本「らしさ」であって、模倣とは異なるシミュラクル的性質のものであった。訪れた客はその空間スペクタクルを楽しみ、帰りがけには、オーナメントや害虫対策の薬品などを購入し、帰ってから自分の庭を装飾する。博覧会を楽しむ文化の延長として生まれたチェルシー・フラワーショーは、都市文化を享受する人々によって広く楽しまれ、そしてそこでの経験が園芸雑誌や書籍の情報とともに自らの庭に生かされる。そしてそこにもまたシミュラクルとしての庭が現出することになる。

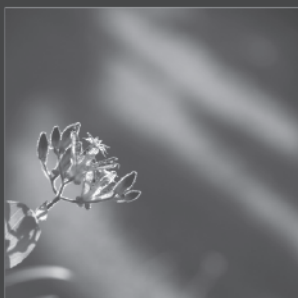
時間の制約もあり、十分に説明することができなかったが、詳細は研究双書、「チェルシー・フラワーショーの誕生：19世紀英国における庭とエキシビション」を参照いただきたい。



園芸のある暮らしと花博の始まり

関西大学経済政治研究所 エキシビションとツーリズム研究班
2021.9.15 @関西大学梅田キャンパス

名古屋大学大学院情報学研究科
小川 明子
a-ogawa@i.nagoya-u.ac.jp



発表の流れ

- 1.英国における庭園・園芸史
- 2.博覧会と園芸
チェルシー・フラワー・ショーの誕生
- 3.英国における庭と園芸の歴史（まとめ）

庭・・・建築物以外の敷地、とりわけ植物が植えられていたり、
余暇を楽しんだりする空間

庭園・・・庭の中でも権力者や有名人が、人を招いたり見せたり
することを目的に構築した比較的大きな庭



1. 英国の庭園・園芸史

- ・英国の植生
- ・西洋における「庭」
- ・ルネサンス整形庭園
- ・18世紀英国式風景庭園
- ・プラントハンターの時代
- ・合理的娯楽としての園芸



英国の植生

- ✓ 氷河期の影響で
植生が貧弱
 - 常緑樹3種のみ
 - 在来植物の数
日本2.2 英国 1
(面積1.5)



Erastus Salisbury Field (1864)
パブリック・ドメイン

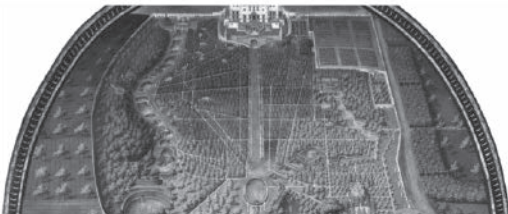
中世 西洋における庭

- ✓ エデンの園とアルカディア
庭園＝楽園, 天国
- ✓ 壁に囲まれた空間
 - 修道院（瞑想と食料）と城の中庭
 - 官能空間としてのイメージ



Lucas Cranach (1530)
ウェブ・ギャラリー・オヴ・アート蔵

メディチ庭園（ヴィラプラトリネのメディチ庭園のジュストウテンスが
描いたリュネット（1598）Giusto Utens パブリック・ドメイン）



ヨーロッパ ルネサンス整形庭園

- ✓ 都市文化の発展と視覚芸術
- ✓ 建築と風景をつなぐ「庭」への着目
 - 左右対称, 規則性, 秩序
 - 驚きを生み出す噴水, 権力を象徴する彫刻, 刈り込まれた木々



イタリア ランテ荘庭園
Orlando Pardo 撮影

ハンプトンコート

- ✓ 1520年代 整形庭園の影響
- ✓ 国王ヘンリー8世の大改造
一日時計, 王朝の紋章, ト
ピアリー
- ✓ 政治的空間としての庭



Terry Hassan 撮影 (CC-BY-NC-SA2.0)

ピクチャレスク様式 (18世紀英国式風景庭園)



National Trust
<https://www.nationaltrust.org.uk/features/what-is-the-picturesque->

風景の中に不規則な要素を取り入れ、小道を進むことで風景が変わる

↑↓

1点からの眺めを重視し、管理を基礎とする大陸的整形庭園



16-17世紀における
「庭」と「自然」をめぐる思想と文学

- ✓ J. ミルトン『失樂園（1667）』
- ✓ W. テンプル『エピクロスの庭について（1685）』『シャラワジ』
- ✓ J. アディソン「人工に似ている自然」（1712）
- ✓ A. ポープ「ゲニウス・ロキに聞け」

基本的にはヨーロッパ整形庭園を承認しつつも、「管理された自然・風景」に美を見出す庭園観

9

The Power of PowerPoint - thepopp.com

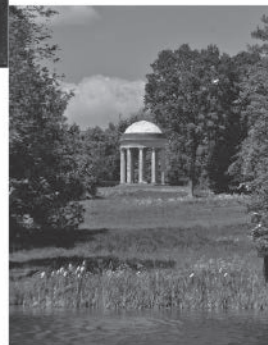


C. ロラン(1680)「ヘリコン山のアポロとミューズ」
ボストン美術館蔵

- ✓ 上流階級子弟のグランドツアー
- ✓ 大陸風景画人気
- ✓ 廃墟などを「作り出す」

- ✓ ケイパビリティ・ブラウン(1715?-1783)の大規模風景改造

→ 英国の原初的「風景」ではない
→ 自己顕示的消費としての庭園改造
(遠山, 2002)



W. ケントが手がけたストウ庭園。
絵画の中の建築物や廃墟などを
再現することも人気を呼んだ。
(by Martin Pettit, CC By2.0)

ピクチャレスク様式



ロマン派詩人による湖水地方評価
↑↓
観光客の増加

プラントハンターの時代 (17-19c)



植物帝国主義 (川島, 2020:17)

植物の特徴

「大地から離れることができず、生育する環境を選ぶ」「同種の環境であれば、地球上の遠く離れた地域にも移動しうる」

ゆえに「植物資源を安定して獲得するために、国家がおもてにたち、植物を支配・独占し、さらに植物が生長するのに必要な時間・土地を支配・管理し、植物の環境に働きかける労働力を支配・管理する試み

- 食用植物、薬草、香料、観賞用植物／樹木の世界的採集と導入

→ 上流層向け好事的コレクションと
国家の経済的要請 (野間, 2014)

- キュー植物園を中心に、大英帝国の富を投資した知的・物的ネットワークの形成を目指した壮大な国家事業

→ 帝国主義的ネットワークとの連動・中継基地としての植民地植物園

ガーデネスク様式

- ✓ 19cヴィクトリア朝
- ✓ カラフルな熱帯の花を用いた幾何学花壇
- ✓ エキゾチックな装飾や建築



園芸という「合理的娯楽」

1. 中流階級のヴィラ

- ✓ 都市人口の増加とスラム、公害
- ✓ 中流階級の郊外住宅 ヴィラ
＝スケールダウンした貴族の庭園付郊外住宅
「農村地主の生活形式を模倣することで、都市的な環境から空間的にも心理的にも距離を置いたアルカディア（川島,1999）」
- ✓ 自ら手入れのできる庭
＝「適度な身体の運動と、植物にかんする知的な興味とを結びつけることが可能な合理的な娯楽（川島,1999,p.56）」



Daniel Case
Wikipediaより転載

園芸という「合理的娯楽」 2. 労働者階級のテラストハウス

- ✓ 都市人口の増加とスラム、公害
- ✓ テラストハウス＝低層住宅＝前庭

＝ 下位にある階級が、〈園芸という〉同じ関心を共有
生活態度を改良し、家庭の価値、人格改善する可能性
(川島,1999)

都市生活の改善と園芸

- ✓ 鉢植えとウィンドウガーデン
- ✓ ウォーディアンケース
- ✓ 労働者の生活改善と植物
- ✓ アーツアンドクラフツ運動との関わり



wikipediaより転載
パブリック・ドメイン



2. 博覧会と園芸

- ・ ロンドン万博から日英博覧会
- ・ 雑誌とイングリッシュガーデンの発明
- ・ チェルシー・フラワー・ショーの誕生



1851年 第1回 ロンドン万国博覧会

- ✓ 水晶宮（温室技術）
- J. パクストン（1803-1865）
・ 公園の設計
- ✓ 跡地利用としての園芸協会
（1804-）常設庭園

McNeven, J., The transept from the Grand Entrance(1851)
保全運動で残されたニレの木が見える。Wikipediaより転載



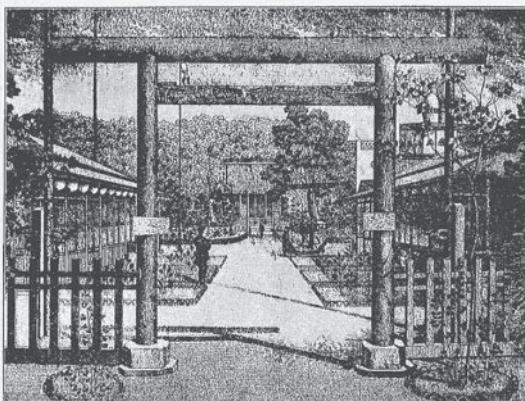
英国園芸協会リンドレイ図書館所蔵
1966年国際園芸博とされるマルキー

1866年 ロンドン国際園芸博

- ✓新しい品種発表と同時に、
「ディスプレイ」への着目
- ✓マルキー（帆船技術を応用）
を用いたスペクタクル演出

1873年 ウィーン万国博覧会

- ✓日本庭園（神社）
- ✓シーボルトらによる選
定、演出
- ✓終了後、英国に移築



景の真正園社本日會覽博國澳

博覧会倶楽部編『海外博覧会本邦参同史料』（1928）
国立国会図書館



日英博覧会絵葉書
(筆者個人蔵)

1910年 日英博覧会

- ✓ 本格的日本庭園への注目
- キュー植物園に一部保存
- 石灯籠など日本的装飾への関心
- 「中国からの陶器 (China)の風景と同じ!」
- 「日本の石灯籠や装飾を並べたからといって日本庭園というわけではない」

(Tachibana, Daniels&Watkins,2004,Owen&Gavin,2004)



「ワイルド・ガーデン」の書影。『スエーデンとモナコの園芸』ルパート・ワグネルによる図解図 (Wikipediaより転載)。
「自然園」に於ける上りなる風景である。

ヴィクトリア期 園芸ジャーナリズムと 「イングリッシュガーデン」の模索

✓W.ロビンソン「ワイルド・ガーデン」

= 折衷的Wilderness

その地の気候に合った樹木や宿根草、球根を植栽し、草葉の色合いや質感とともに、多種立体的に組み合わせ、手入れを減らし季節ごとに楽しめる庭

→ 海外の植物を積極的に「自然に見えるように」植栽

※ 球根、宿根草の活用

「英国の庭」の発明

- ✓ 宿根草を用いた色彩的配置
- ✓ 郷愁
- ✓ 「実践」としての園芸

急速な工業化や都市化に対する田園回帰、そして帝国主義的イデオロギーに対する英国らしさの追求が庭という空間を舞台に提起

Guido Gerdling (Wikipediaより転載)
コテージガーデンのイメージ



Aquiloneves (Wikipediaより転載)
ポードーガーデンのイメージ
丈の低い草から奥に向かって高い草となり、四季折々に彩りを考えた花が咲く庭となっている



1912年国際園芸博覧会

- ✓ チェルシー：王立病院敷地
- ✓ マルキー下の大規模展示
- ✓ 日本はじめ、西欧諸国も参加
- ✓ ロックガーデンなどのモデルガーデン人気

チェルシー・フラワー・ショー (1913)

- ・敷地を現状復帰
- ・数週間前からの準備と撤去
- ・モデルガーデン人気



1913年に出品されたモデルガーデン
会期が終われば撤去される
英国王立園芸協会リンドレイ図書館蔵

当時の新聞記者の視点

✓ 園芸という趣味の定着

あらゆる階級にとっての「合理的趣味」

「労働者が耕作可能な庭園を郊外に手に入れ、最大限活用可能(London Daily News 1913.5.14)」

「(高額な)入園料の設定が混雑を避けられていない(Aberdeen Press and Journal, 1913.05.21)」

「誰もがこの庭を自宅に再現可能(London Daily News 1913.5.21)」

✓ ディスプレイへの着目 (フラヌールの, スペクタクル的)

どの植物も魅力的で、描写するのに困ってしまう。形、色、どれをとっても素晴らしい。バラの花は無数にあるように見える。滝のように咲き誇り、香りの良いバラの茂みはまるで万華鏡のように美しい。自らの重みで垂れ下がる真紅のつるバラ。こうしたバラだけでもロンドン中の人びとを誘惑するのに、戸惑うほどの美しさを持つカーネーションや、驚くほどのチューリップもある。(中略)アジサイの展示もきわめて美しく、大量に展示されることで素晴らしい効果を上げている。非常に繊細なピンク、多様なブルー、そしてゴージャスな赤、堂々とした紫などが、アーティストでなければ決して表現できないかたちで見事に配置されている(Pall Mall Gazette, 1913.05.19)。



3. 英国における庭と園芸

英国の庭園：グローバルとローカル

- ✓ 政治的空間としての大陸型整形庭園
- ✓ それに対抗する形での衒示的消費としての18世紀英国風景庭園
- ✓ 帝国の支配力を表象するガーデネスク様式
- ✓ 田園への郷愁と英国らしさの追求としてのイングリッシュ・ガーデン

英国の庭園：政治的空間と市民の実践空間

- ✓ 政治的空間として大規模庭園
- ✓ 「市民」の庭という思想と実践
- ✓ 表象と消費の「モデル庭園」
 - ー 「シミュラークル」としての庭

参考文献

- Royal Horticulture Society (1864) *A Handbook to the Royal Horticultural Gardens: A Sketch of the history of the RHS at Kew*
- Robinson, W. (1883) *The Wild Garden*,
- Gertrude, J. (1900) *Home and Gardens*, Longmans Green and Co.
- https://archive.org/details/homegardennotest00jcky_1
- ルフェーブル, H. (1974=2000) 『空間の生産』 青木書店.
- ボードリアール, J. (1979=1982) 『象徴交換と死』 (今村仁司・塚原史訳) 筑摩書房.
- Desmond, R. (1977) Victorian Gardening Magazines, *GardenHistory*, Winter, 1977, Vol. 5, No. 3 (Winter, 1977), pp. 47-66.
- ボードリアール, J. (1981=1984) 『シミュラークルとシミュレーション』 (竹原あき子訳) 法政大学出版局.
- Whiten, F. & G. (1988) *The Chelsea Flower Show*, Cassell.
- 吉見俊哉 (1992) 『博覧会の政治学』 中公新書.
- 加藤政洋・大城直樹 (2006) 『都市空間の地理学』 ミネルヴァ書房.
- 白幡洋三郎 (1994) 『プラントハンター：ヨーロッパの植物熱と日本』 講談社選書メチエ.
- Gregory, D. (1994) *Geographical Imagination*, Blackwell.
- アーリ, J. (1995=2003) 『場所を消費する』 法政大学出版局.
- 小林章夫 (1998) 『英国庭園物語』 河出書房新社.
- 若林幹夫 (1998) 「イメージのなかの生活」 内田隆三編 『情報社会の文化2 イメージのなかの社会』 pp.21-47.
- 川島昭夫 (1999) 『植物と市民の文化』 山川出版社.
- Elliott, B. (2001) Flower Shows in Nineteenth-Century England, *Garden History*, Winter, 2001. Vol.29, No.2, pp.171-184.
- 遠山茂樹 (2002) 『森と庭園の英国史』 文春新書.
- 中山理 (2003) 『イギリス庭園の文化史』 大修館書店.

- W.ベンヤミン(2003)『パヴァーージュ論第1巻』岩波書店。
- Owen,J.&Gavin,D.(2004) *Gardens through time: Celebrate 200 years of gardening with the Royal Horticultural Society*, BBC Books.
- Geddes-Brown,L.(2004) *Chelsea: the Greatest Flower Show on Earth*, Dorling Kindersley Book.
- Tachibana,S. Daniels,S.&Watkins,C.(2004) Japanese gardens in Edwardian Britain: Landscape and transculturation, *Journal of Historical Geography*, 30, pp.364-394.
- 西川智之(2006)「ウィーンのジャポニズム(前編): 1873年ウィーン万国博覧会」名古屋大学言語文化論集27(2),p.175-187.
- 松村伸一(2006)『19世紀末文化の環境としてのロンドンと女性たち』青山学院女子短期大学想像文化研究所年報(14)pp.111-126.
- Kehler,G.(2007) Gertrude Jekyll and the Late-Victorian Garden Book: Representing Nature-Culture Relations, *Victorian Literature and Culture*, 2007, Vol. 35, No. 2, pp. 617-633.
- 橋セツ(2009)「庭園のなかの野生と異文化: ウィリアム・ロビンソン『ワイルドガーデン』」(1870)の思想と実践について)神戸山手大学紀要11号,pp.141-156.
- 村田麻里子(2010)「ビクチャレスクの観光化: 足立美術館の庭園とコレクションをめぐる一考察」関西大学博物館紀要, 16, pp.1-17.
- 井原緑(2012)ランドスケープの変貌: 国際園芸博覧会の自然観, 奈良県立大学研究季報, pp.137-169.
- 井原緑(2013)「大阪国際花と緑の博覧会」を中心とした国際園芸博覧会に伴う土地利用変化とその背景」ランドスケープ研究 76(5),pp.655-660.
- Elliott,B.(2013) *RHS Chelsea Flower Show: A Centenary Celebration*, First Frances Lincoln Edition.
- Kimic,K.(2014) Garden Exhibitions as a Special Kind of Garden: The Leading Value in the Historical Perspective in Relation to the Present, *Technical Transactions Architecture*, 6-A, pp.9-18.
- 近藤三雄・平野正裕(2017)『絵図と写真で辿る明治の園芸と緑化』誠文堂新光社.
- 惟野昌宏(2017)『日本園芸界のバイオニアたち』淡交社.
- Hao,Y.(2017) Themes and Originality of Show Gardens in UK Flower Show, *Journal of Landscape Research* 9(2), pp.93-96.
- Womack,E.C.(2018) Window Gardening and the Regulation of the Home in Victorian Periodicals, *Victorian Periodicals Review, Baltimore*, Vol.51(2), pp. 269-288.
- ライト,J.D.(=2019)『ヴィクトリア朝時代: 19世紀ロンドンの世相・暮らし・人々』原書房.
- 遠山茂樹(2019)『歴史の中の植物: 花と樹木のヨーロッパ史』八坂書房.
- 桑木野幸司(2019)『ルネサンス庭園の精神史』白水社.
- 川島昭夫(2020)『植物園の世紀』共和国.え
- 川端有子(2020)『庭園家ガートルード・ジーキル』玉川大学出版会.